

弥生時代終末期における遺跡群の検討

— 伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期社会分析の前提として —

石 井 智 大

1 はじめに

弥生時代の社会構造ないしは社会集団に関する研究では、集落が分析対象とされることが多い。そうした弥生時代集落の分析においては、マクロ・ミクロ様々な手法がとられてきた。その中の一つとして、集落の分布状況を検討し、一定の地域内にまとまりを見せる遺跡群を、何らかの社会集団を反映した単位として把握するという分析方法がよく用いられる。この分析方法は、遺跡群内の各集落間の関係性を具体的に検証する作業をその後に必要とするという点でやや演繹的ではあるが、遺物・遺構など様々な研究に際しての分析単位となる前提的枠組みを作るという点において有効である⁽¹⁾。

弥生時代に限らず縄文時代や古墳時代においても、社会構造や社会集団について考えていく上でこうした遺跡群の分析が有効であることは、これまでの研究でも明らかである。それは弥生時代から古墳時代への過渡期となる弥生時代終末期⁽²⁾においても例外ではない。しかし一方で、弥生時代終末期は、大規模な平野や盆地全体を包括するような広域にわたる社会的なまとまりの形成が重視されがちな時期である。次代の古墳時代社会の形成という動向をにらんだ時に、こうした広域にわたる社会的なまとまりの形成が非常に重要であることは確かであり、現在の研究ではこれらの広域にわたるまとまりの間の交流関係などに特に注目が集まっている。ただし、この広域にわたる社会的まとまりの内部構造に対する検討は進んでいるとは言い難いであろう。そこで本稿では、弥生時代終末期に濃尾平野を中心としたまとまりの形成が考えられる伊勢湾沿岸地域の中でも伊勢湾西岸地域⁽³⁾を取り上げ、その内部構造を検討するための分析単位ともなりうる遺跡群の把握を試みたい。

2 遺跡群把握に関する研究と本稿の目的

遺跡群の把握とそれを通じた社会構造や社会集団に関する分析は、発掘調査件数の増加に伴って面的な遺跡の分布状況にある程度把握することが可能になり始めた頃から行われるようになってきた。遺跡群といっても検討対象とする地理的空間の広狭によって様々な規模のものが抽出可能であるが、弥生時代の研究では山地などによって地形的に周辺地域から分離される平野や盆地などが一つの分析単位として取り上げられることが多い。こうした広さの地理的空間を分析対象として抽出される遺跡群は、たとえば大阪平野の加美遺跡・亀井遺跡・久宝寺遺跡などのようにごく近接して存在するいくつかの遺跡の密集地帯というよりは、一定地域内に分布する多数の遺跡が形成する緩やかなまとまりとして捉えられる。

伊達宗泰による奈良盆地を対象とした分析は、こうした遺跡群研究の初期の事例としてあげられるが、その中ではすでに立地や水利条件など地理学的な要素を加味した遺跡群の把握が行われていることが注目される（伊達 1963）。その後、石野博信による奈良盆地における分析（石野 1973）や、寺沢薫による大阪湾沿岸地域や奈良盆地における分析（寺沢 1974・1979）、田中義昭による関東地方南部における分析（田中 1976）など、遺跡群の抽出とその検討によって、各地域の社会構造やその動態、地域内に存在する集団の歴史的性格などを明らかにしようとする試みが次々と行われることとなった。そして現在に至るまで、こうした遺跡群の把握は地域社会の構造や動態に関する分析を行う上での有効な手段の一つとして行われており、各地におけるケーススタディが数多く蓄積されている（安

藤 1991、小沢 2002、高瀬 2006 など)。

これらの先行研究からは、遺跡群の把握という方法に二つの側面を見て取ることができる。一つは、限られた時間枠内における遺跡群の抽出である。そしてもう一つは、時系列に沿った遺跡群の変化の把握である。

前者では、ある特定時期の集団やその空間的領域を把握するとともに、その時期における社会構造を考えることが目的といえる。また、後者では、社会的動態を明らかにするとともに、時間的経過の中における社会構造の変化や複雑化の過程を考えることがその主たる目的となっているといえる。

この二つの側面は、弥生時代社会の構造を考えていく上では表裏一体として扱うべきであろうが、紙幅も限られている本稿ではあえて前者の側面を主軸に据えた検討を行いたい。社会の動態や構造変化ではなく、あくまで一定の時間枠内における社会構造の解明を念頭に置き、弥生時代終末期の伊勢湾西岸地域という限られた時空間において認識できる大きな遺跡群を把握することで、当該期の社会構造や物流などを検討する上での基礎的な分析単位となりうる社会集団の単位を抽出することを主たる目的とする。もちろん、こうした検討は、時間軸に沿った遺跡群の動態を明らかにするための一つの定点を定めるという意味も有している。

3 伊勢湾西岸地域における遺跡群の抽出

それでは、伊勢湾西岸地域における弥生時代終末期の遺跡群を、遺跡の分布と河川・山地などの基礎的な地理的環境をもとに具体的に抽出していきたい。検討にあたっては、当該期の遺跡すべての分布状況を検討材料としているが、それらの遺跡の中で発掘調査によって内容がある程度明らかになっているものは少数にすぎず、その他の多くの遺跡の内容は不明である点が問題である。しかしながら、発掘調査によって得られている情報を有効に活用することは必要である。そこで、遺跡群を把握するために作成した遺跡分布図（第1図）の中では、住居が検出されている遺跡をそれ以外の遺跡と区別できる形で示した。先に述べたように、本稿では作業を通じて把握した遺跡群の単位に対して何らかの社会集団の単位を投影することを視野に入れているため、人間の居住領域に重心を置きたいと考えるためである。以下、抽出された各遺跡群について個別に述べていく。

A：朝明川流域群 朝明川下流域を中心に員弁川下流域や海蔵川流域にまたがって遺跡が分布している。遺跡数はそれほど多くない。久留倍遺跡（1）・山奥遺跡（2）などが中心的存在としてあげられる。久留倍遺跡では住居の他に墓も検出されている。山奥遺跡は丘陵上に位置しており、後期後半～終末期前半にかけての住居が多数検出され、鉄製品も多く出土している。やや南に位置する東日野遺跡（3）なども地形的にはこの群に含まれる可能性が高いであろう。なお、員弁川上流域にも少数の遺跡が存在するが、この群に含まれるとは考えにくい。

B：鈴鹿川流域群 鈴鹿川流域に遺跡が点在しており、遺跡数は多いものの、ややまとまりには欠ける。ほぼ同時期に営まれたと考えられる八重垣神社遺跡（4）・宮ノ前遺跡・神戸中学校校庭遺跡（5）が集まっている地点をはじめ、上流部の地藏僧遺跡（6）や勢武谷遺跡（7）、海岸部の岸岡山Ⅲ遺跡（8）など、いくつかの中心的存在と考える集落が散在していることは、この群がいくつかのさらに小さな単位の遺跡群によって構成されている可能性を示している。岸岡山Ⅲ遺跡は海岸部の独立丘陵の斜面地に存在し、多数の後期後半～終末期の住居が検出されている。勢武谷遺跡は丘陵頂部に立地し、複数の住居が検出されている。集落の周りには柵をめぐらせていたと推定されており、弥生時代終末期のものと思われる鉄製品も出土している。また、やや南の中ノ川流域に存在する中瀬古南遺跡（9）なども、地形的にみれば鈴鹿川流域群に含まれる可能性が高いであろう。

C：安濃川流域群 安濃川中・下流域から志登茂川・岩田川にかけて多くの遺跡が分布する地域である。道路建設などのために発掘調査が多く行われているということもあるが、低地と丘陵地が複雑に入り組んだ地形をなし、居住に適した場所や可耕地も多いと考えられることから、実際に遺跡数も他の遺跡群より多いものと思われる。祭祀



第1図 伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期遺跡の分布と遺跡群

に関わる遺構が検出され、銅鏃も多く出土している六大A遺跡（10）や、その周囲に展開している中蔭遺跡・橋垣内遺跡などがこの群の中心的存在とみることができるが、南部にも高松C遺跡（11）のように低い丘陵上に住居が多数検出されている遺跡があり、中心的な集落となっていた可能性がある。この群も鈴鹿川流域群と同様により小さな遺跡群に細分可能かもしれない。また、前田遺跡など、墳墓のみが検出されている遺跡もある。

D：雲出川流域群 雲出川下流域及び雲出川の支流の中村川流域に多くの遺跡が分布しており、遺跡の分布密度がかなり高い地域といえる。特に雲出川下流域には片部遺跡（12）・西肥留遺跡（13）・雲出島貫遺跡（14）など目立つ遺跡が集中している。片部遺跡では、弥生時代終末期に属する可能性のある堰が検出されている。西肥留遺跡では多数の住居が検出され、鉄鏃・銅鏃など多くの金属製品が出土したほか、弥生時代終末期に属する可能性の高い銅鐸も出土しており、金属器加工を行っていた可能性も指摘される。これらの遺跡群よりやや西の中村川流域では、丘陵上に小谷赤坂・清水谷遺跡（15）のように環濠をめぐらせる遺跡が営まれている。この付近の丘陵部では、東峡遺跡（16）・西野遺跡など、墳墓のみが検出されている遺跡もある。また、この群で注目されるのは、貝蔵遺跡や赤部遺跡（17）、雲出島貫遺跡など雲出川下流域の遺跡で、北陸地方や東海地方東部など他地域との関係性を示す土器が多く出土していることである。

E：阪内川流域群 阪内川・三渡川などの流域に遺跡が分布する。散布地などが多く、内容が判明している遺跡は少ない。阿形遺跡（18）では環濠と思われる溝が検出されている。この溝は弥生時代終末期に埋没したと考えられるが、それまでは環濠として機能していたものと思われる。弥生時代終末期の居住域は未確認であるが、中心的な集落であった可能性が高い。堂ノ後遺跡（19）でも複数の住居が検出されている。また、瀬干遺跡のように、墳墓のみが検出されている遺跡もある。

F：櫛田川流域群 櫛田川中・下流域や祓川流域の河岸段丘上を中心に遺跡が分布する。遺跡の分布はやや散漫で、まとまりに欠ける。北側については阪内川流域群との明瞭な境界を決し難い。阪内川流域群との境界付近には草山遺跡（20）が存在しており、多数の弥生時代終末期に属する竪穴住居が検出されているほか、小銅鐸も出土しているなど、この遺跡群の中心的存在といえる。祓川の東に位置する北野遺跡（21）もこの遺跡群の中心的な集落であると考えられ、後期後半から終末期にかけての多数の住居が検出されている。墳墓もいくつか見つかっており、寺垣内遺跡や織糸遺跡（22）では方形周溝墓群が検出されている。織糸遺跡では埋葬施設から副葬品として玉類が出土している。

G：宮川流域群 宮川流域から外城田川流域に展開する遺跡群である。遺跡数はそれほど多くなく、分布もやや散漫である。野垣内遺跡（23）では多数の住居の他に墳墓も検出されており、この遺跡群の中心的存在をなしていると思われる。その付近の中楽山遺跡や小社遺跡などでも住居や墳墓が検出されている。一方で、外城田川上流域には勝田遺跡（24）をはじめいくつかの集落が見つかっており、また宮川の東側に存在する隠岡遺跡（25）でも多くの住居が検出されているなど、核となるような集落・集落群がいくつか存在している。全体の遺跡数は多くなくとも、やはり内部にいくつかの小遺跡群を内包しているようである。

H：志摩半島北東部群 志摩半島の北東部にいくつかの遺跡が分布しており、これらを一つの遺跡群として把握した。この群の遺跡数はごく少数で分布も散漫であり、また立地的に海を意識していると思われる遺跡が目立つなど、他の遺跡群と同様の性格を持つものとして扱うことは難しいかもしれない。海岸段丘上に立地する白浜遺跡（26）からは住居が検出されているが、銅鏃が多数出土している点などからみてこの群の中心的存在をなすものと考えられる。島にも遺跡が見られ、答志島にはおぼたけ遺跡（27）がある。この遺跡では古墳時代前期の住居が検出されており、弥生時代終末期にも人が居住していた可能性は高い。

以上のように、8単位の遺跡群が抽出できた。ただし、開発などによって発掘調査が進んでいる地域とそうでな

い地域とがあるなど、基礎となる情報にやや偏りが生じていることは否めない。遺跡の分布が散在的である櫛田川流域群や志摩半島北東部群などでは当該地域での開発行為も少なく、そうした情報の偏りによる影響を考慮しておかねばならないだろう。しかしながら、遺物散布地など発掘調査を経ていなくても遺物が判明している遺跡については極力情報を取り込んでいるため、遺跡の分布傾向自体の把握には大枠として問題ないものとする。

これらの抽出された遺跡群について概観すると、まずその空間的領域は、各遺跡群ともほぼ径 10km 内外の広さを持つ。遺跡群名として河川名を用いているように、遺跡は基本的には河川に沿ってまとまった分布状況を示しているが、一つの遺跡群内においても単一の河川ではなく複数の河川ないしは支流にまたがって分布している。どちらかといえば、河川を基軸としているよりは、大規模河川を中心として小平野が展開しているため、そうした地形的影響によって河川に沿った分布状況を示しているとみた方がよいであろう。

遺跡群内部に注目すると、いずれの遺跡群にも共通する状況として、核となるような集落もしくは遺跡の集中部が存在する点が注目される。遺跡群内に核となりうる集落や遺跡集中部が複数存在する例もいくつかの遺跡群で認められる。核では金属器や他地域との関係を持つ土器の出土が目立ち、物流や特殊な技術・原料を要する物品の生産に際して要となるような性格を持っていたことを示している。また、丘陵上に営まれる集落が存在することや、墳墓が集落とは別に独立的に存在している場合があることなども多くの遺跡群で確認できる。墳墓は居住域に接して営まれている例も多く、こうした墓域と居住域の関係における違いも注目されよう。

4 遺跡群の性格に関する予察

伊勢湾西岸地域における弥生時代終末期の遺跡群を抽出し、それらについて概観してきた。これらの遺跡群の単位が当該期の何らかの社会集団の単位を反映しているのか、そして反映しているならば、どのような社会集団として捉えられるのかは、これから各種の検討を通じて考察していくべきものである。しかしながら、今後この遺跡群単位を分析単位として扱っていく上では、こうした点について予めある程度の見通しを持っておくことも必要であろう。

本稿の検討の中から見出されるこうした見通しを得るためのキーワードとしては、各遺跡群における、空間的領域の広さ、核の存在、内部におけるより小規模な遺跡群の存在、そして複数河川にまたがる遺跡の分布状況という 4 つの点がとりあえずあげられよう。この少ない手がかりのみから遺跡群の社会集団としての性格を考えていくことは困難である。そこで、集落や遺跡群などの検討によって弥生時代の社会構造について検討を行っているいくつかの先行研究の成果を参考として、本稿で抽出した遺跡群について若干の予察を行ってみたい。

各研究において想定されている社会集団は、対象とする地理的範囲や遺跡群の規模、そして分析の視点などによって様々であるが、弥生時代研究においては農業共同体という集団組織の存在が常に意識されており、その実体としての把握を念頭に置きつつ遺跡群の把握が行われてきた面があるといえよう。このことが、水系や水利条件を強く意識した遺跡群の把握へとつながっている。たとえば、寺沢薫は、水系を基軸とした集団のまとまりを重視し、その基礎的な単位をなす小遺跡群の領域を「基礎地域」ないし「小共同体」として把握している。この基礎地域は径 5 km ほどの空間的領域を持ち、その多くには母集団と呼ばれる中心的な遺跡が存在するとされる（寺沢 1979・2000）。また、都出比呂志は「農業共同体的結合」が中小河川流域程度の単位で形成されているとしている（都出 1984）。

単純に空間的領域の広さで比較すると、本稿で抽出した遺跡群は複数河川流域に広がって分布し、基礎地域や農業共同体的結合とされるような集団より広い領域を持つ。どちらかといえば、内部に存在するより小規模な遺跡群こそが基礎地域や農業共同体的結合として捉えられる集団に対応するものと想定され、本稿で抽出された遺跡群自体はそれより上位のまとまりとして捉えられるのではなかろうか。

弥生時代の社会構造・集団研究では、分析対象となる資料が豊富な中期に焦点が当てられることが多く、そのため水系を越えて広がるような広い領域を持つ社会集団に対する概念にはやや乏しい。酒井龍一によって畿内大社会論も展開されているが（酒井 1984）、その実体は、拠点集落を中心とした等質的なまとまりによる日常活動空間が、生産・消費を媒介としてつながり合った連続的な集合体として捉えられており、弥生時代終末期の伊勢湾西岸地域の遺跡群をこうした集合体として見ることは難しいであろう。

他方で、古墳時代社会への展開という視角においては、広域にわたる領域を持つ集団についての概念化も図られている。寺沢薫は基礎地域より上位のレベルでの社会集団の形成についても考察を行い、複数の基礎地域の結合からなる「大地域」ないし「大共同体」というまとまりの存在を示している（寺沢 1979・2000）。寺沢はこの大地域を水利を基軸としたまとまりと考えるが、一方でこのまとまりを「クニ」と呼び、その内部構造や存立基盤に政治的要素を強く見出している。同様に、都出比呂志も、農業共同体の系列化によってより大きなまとまりである「政治的結合体」が形成されたとみており、その内部には首長と共同体成員との間の階級関係などより高度な社会構造の形成を想定する（都出 1970）。

これらで提示されている社会集団は、示されている規模や遺跡群としての構造などから見る限り、本稿で抽出した遺跡群の様相と近いように思われる。ただし、これらの社会集団概念は背景に歴史的な集団概念を多大に含むものであり、詳細な検討を経ていない現在、安易に本稿の遺跡群をこうした概念と照応させることはできない。しかしながら、これまでに考えられてきた社会集団のあり方においては、実際の農耕における協働範囲を超えるような規模での集団の結合に、より政治的・経済的な関係性が強く働いていることが想定されているということは言えよう。本稿で抽出した遺跡群で核となる集落が物流や特殊技術・原料を要する物品の生産に際して要となるような性格を持っていたと考えられることから、これらの集落が遺跡群中での政治的・経済的な中心としての機能を果たしていたことが窺われる。ここでは、こうした点も踏まえつつ、伊勢湾西岸地域における弥生時代終末期の遺跡群に対して、政治的・経済的な関係性を基軸としてまとめた社会集団としてのあり方を想定するにとどめたい。

また、その集団間関係については、松木武彦が岡山平野において遺跡の分布や地形条件をもとに設定した「地域集団」のあり方が参考となろう（松木 1993）。松木の示した地域集団は、農業における生産活動を基盤としつつも各種生産活動における領域を含むものとして把握されており、その領域はほぼ径 5 km 圏内とされている。⁽⁵⁾ 古墳時代初頭以降には岡山平野に存在する 4 つの地域集団が政治的な意志を共有する一体的関係にあったと推測されているが、重要であるのは各地域集団の政治的・経済的な独立度が相対的に低かったと想定している点である。伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期遺跡群でも、雲出川流域群・阪内川流域群・櫛田川流域群などは遺跡群としてのまとまりは見せるものの、その群間の境界は遺跡分布状況からみるとやや曖昧である。集団としての規模に違いはあるが、松木の示した地域集団同様に、伊勢湾西岸地域の遺跡群も政治的・経済的要素を基軸として結合しつつも相対的な独立性は低く、集団間に明確な領域境界が設定されないようなものであった可能性を考えておきたい。

5 小結 — 今後の課題 —

本稿で抽出した弥生時代終末期の遺跡群は、繰り返し述べてきたように、各種分析のための前提となる分析単位とすべく設定したものである。したがって、遺跡群の抽出自体が何らかの結論となるものではない。演繹的な方法論による研究のための前提の整備にあたるに過ぎず、今後の各種検討においてこの枠組みを参照しつつ議論を行うことによって、初めて一定の成果が示せるといえよう。

ただし、この遺跡群は全くの恣意的な遺跡の集合体に過ぎないわけではなく、前章で考えたように一定の空間的領域を持つ社会集団の単位を反映しているものと想定される。そうすると、今後検討していくべき課題としては、

まず各々の遺跡群の内部構造の検討があげられよう。弥生時代中期の研究では、一定の地域内に分布する遺跡群間に有機的な関連性を想定し、各種機能を内包する集合体として一体となって地域社会を構成していたという見方が出されており、それが拠点集落論や高地性集落機能論などとも相まって社会構造の分析へと発展している。伊勢湾西岸地域の弥生時代中期研究でもそうした見方が示されている（穂積 2005、石井 2006）。また近年では、こうした見方に各遺跡の詳細な立地条件等を加味した研究も進められてきている。弥生時代終末期の遺跡群についても、これらような視点をもってその内部構造に関する検討を行わなければならない。それが、抽出した遺跡群の社会集団としての性格を具体化させていくための第一歩となろう。

また、各遺跡群間の差異や関係性に関する検討も大きな課題である。その分析対象となるのは遺物や遺構である。これまでに、土器などの遺物に基づいて集団間の関係を分析する試みは広く行われてきた。近年では各遺跡群内部で検出された遺構に基づく詳細な議論も展開されている（高瀬 2006）。こうした遺物・遺構の検討から各遺跡群間の差異や関係性を検証していく議論がなされることにより、前提として設定した遺跡群を何らかの社会集団として考えることの妥当性がより明確に保証されることとなろう。そして同時に、これが伊勢湾沿岸地域に形成された広域に及ぶまとまりの実態に接近するための大きな手がかりとなるものと思われる。

そして、当然のことながら時間軸に沿った検討も必要である。これまでのこうした遺跡群把握の研究では、時間軸に沿った遺跡群の動態を併せて検討していることが多い。これは社会の動態を知る上で有効な手段となっており、先にも述べたように遺跡群把握を行う大きな目的のうちの一つである。本稿では限られた時間枠内における遺跡群把握のみを行ったが、本来は時間軸に沿った動態についても検討すべきであろう。こうした検討は、弥生時代終末期とその前後の時期との間だけではなく、弥生時代終末期の中でも行っていく必要がある。これまでも伊勢湾沿岸地域の弥生時代終末期における遺跡の動態については赤塚次郎が言及しているが、そこでは伊勢湾西岸地域での廻間Ⅱ式期の集落の衰退が社会の動態を考える上で重視されている（赤塚 1996）。ただし、例示されている遺跡は、本稿で抽出した遺跡群中でも核の一つとなっている遺跡ではあるものの、ごく少数の単体の遺跡のみである。遺跡群の動態として見た場合にはどのような傾向が見られるのかという点については検証していく必要がある。

社会の動態という面から見れば、弥生時代終末期という時期は、その後の古墳時代へとどのように社会が変化していくのかを考える上で重要である。弥生時代の遺跡群の検討も、その後の古墳の築造状況を踏まえて行われている例も多い（伊達 1963、都出 1974、松木 1993 など）。伊勢湾西岸地域でも、こうした視点での検討は必要である。

以上のように、本稿をもとに検討していくべき課題は山積している。これらの課題について検討することによって、伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期における社会構造とその変動を少しずつでも明らかにしていくことができるであろう。具体的な検討作業については、また別稿に期したい。

【註】

- （1）考古学における地域研究の一環として何らかの分析を行おうとするとき、その立論の基礎・前提となるべき分析単位の設定は重要である（石黒 1988、高瀬 2005）。本稿で抽出を試みる遺跡群単位も、実質的には遺跡の平面的分布のまとまりに過ぎないが、今後の伊勢湾西岸地域における弥生時代終末期に関する分析において基礎・前提となる分析単位としては有効なものであると考える。
- （2）近畿地方の庄内式期に併行する時期を指すものとする。本稿で対象とする伊勢湾西岸地域では、一部布留式期初頭まで含んでいる可能性が高いものの、廻間Ⅰ～Ⅱ式期（赤塚 1990）がほぼその時期に該当するものとする。伊勢湾西岸地域で用いられることがある島貫編年（川崎 2001）では、島貫Ⅱ（古）～島貫Ⅲ（古）期を該当させる。この時期を弥生時代終末期と捉える立場と古墳時代初頭と捉える立場とが長らく並立しているが、筆者は前者の立場を取っている。
- （3）本稿で対象とする伊勢湾西岸地域とは、揖斐川・長良川・木曽川の木曾三川から志摩半島までの間の伊勢湾に面した地域を指す。木曾三川は川幅も広く、下流域の川沿いでは洪水によって安定した居住が望めない土地も多いなど、地理的区分のみならず集団の空間的領域を区切る上でも大きな境界をなしていると考えられる。

- (4) 出土土器が資料として公表されているなど、現時点で時期が確認できる遺跡を中心として集成した。なお、各遺跡個別の報告書等の参考文献については、紙幅の関係上から割愛させていただいた。ご容赦願いたい。
- (5) 各地域集団が地理的環境などによってやや異なった性格を持つことも想定されており、本稿における志摩半島北東部群などの性格を考える上でも参考となろう。

【参考文献】

- 赤塚次郎 1990 「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 10 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1996 「前方後方墳の定着－東海系文化の波及と葛藤－」『考古学研究』第 43 巻第 2 号 考古学研究会
- 安藤広道 1991 「弥生時代集落群の動態－横浜市鶴見川・早淵川流域の弥生時代中期集落遺跡群を対象に－」『調査研究集録』第 8 冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井智大 2006 「居住域と墓域の空間的関係とその変動」『墓と集落－その見えない関係－』中部弥生時代研究会第 12 回例会発表要旨集 中部弥生時代研究会
- 石黒立人 1988 「弥生時代の美濃地方とその特質」『マージナル』No.8 愛知考古学談話会
- 石野博信 1973 「大和の弥生時代」『考古学論攷』第 2 冊 橿原考古学研究所
- 小沢佳徳 2002 「弥生時代における地域集団の形成」『究班Ⅱ』埋蔵文化財研究会
- 川崎志乃 2001 「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財調査報告 218 三重県埋蔵文化財センター
- 酒井龍一 1984 「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財學報』第 3 集 奈良大学文学部文化財学科
- 高瀬克範 2005 「仙台平野とその周辺における占地特性－縄文時代晩期と弥生時代の包蔵地群分析から－」『古代文化』第 57 巻第 5 号 財団法人古代学協會
- 高瀬克範 2006 「東京湾東岸における弥生後期から古墳前期の集落構成－『臨海型大形集落』の性質をめぐって－」『古代文化』第 58 巻第 Ⅱ 号 財団法人古代学協會
- 伊達宗泰 1963 「遺跡分布よりみた古代地域の考察－奈良盆地の場合－」『近畿古文化論攷』吉川弘文館
- 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』第 22 巻第 3 号 考古学研究会
- 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権－階級形成の日本の特質－」『講座日本史』1 古代国家 東京大学出版会
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－」『考古学研究』第 20 巻第 4 号 考古学研究会
- 都出比呂志 1984 「農耕社会の形成」『講座日本歴史』1 原始・古代 1 東京大学出版会
- 寺沢薫 1974 「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会（上）・（下）」『古代学研究』第 72・73 号 古代学研究会
- 寺沢薫 1979 「大和弥生社会の展開とその特質－初期ヤマト政権成立史の再検討－」『橿原考古学研究所論集』第 4 吉川弘文館
- 寺沢薫 2000 『王権誕生』日本の歴史 02 講談社
- 穂積裕昌 2005 「菟上遺跡中期弥生集落の評価」『菟上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 227-7 三重県埋蔵文化財センター
- 松木武彦 1993 「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団－鹿田集落の地域史的位置づけ－」『鹿田遺跡 3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 6 冊 岡山大学埋蔵文化財センター
- 若林邦彦 2006 「集落からみた「畿内」社会－「基礎集団」をキーワードに－」『シンポジウム記録 5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる諸問題』考古学研究会
- 山田隆一 1994 「古墳時代初頭前後の中河内地域－旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて－」『弥生文化博物館研究報告』第 3 集 大阪府立弥生文化博物館